

もうひとつの農村ユートピア
— ペーター・ローゼッガー『最後の人ヤコブ』における「アメリカ」—

麻 生 陽 子

はじめに

1871年5月2日の『キルヒフェルトの司祭 (*Der Pfarrer von Kirchfeld*)』の祝祭公演において、その作者ルートヴィヒ・アンツェングルーバー (1839-1889) は、グラーツからやってきた当時まだ無名のペーター・ローゼッガー (1843-1918) とはじめて対面した。この約1週間後、かれはローゼッガーの最新作『シュタイヤマルクの物語 (*Geschichten aus Steiermark*)』(1870)を読んだ印象を、本人にこう書き送っている。「まさにあなた特有の創作力や異なる文体の結合には、まずはシュティフターを思わせるものがあり、アウエルバッハを思わせるもの等があります」と。¹ この4歳年長の先輩の指摘を認めながらも、ローゼッガーは謙遜した口調で自分の立場をつぎのように述べている。

あなたは遠まわしにこうおっしゃっているのです、私の本はシュティフターともアウエルバッハとも、ほとんどどちらとも違うのだ、と。[...] もちろんシュティフターとアウエルバッハは、私に偉大な印象をあたえましたし、私の文学作品に影響を及ぼしました。かれらに育てられて成長してしまったからには、私は全力でかれらからわが身をふりほどこうとしています。[...] 自然描写や細密描写においては、シュティフターとほとんどおなじものが認められるでしょう。探そうと思えば、人跡未踏のあたらしい小道がなおもいくつか見つかるかもしれません、ですがその場合、批評家はこう言うでしょうね、それはどこか不自然なものである、と。しかし、荒野の先にあらたな小道を一本見つけ、それどころか自分の後にもさらにほかの者たちがつづくほどにその道を平らにすることが、もしかしたら私にはできるかもしれません。²

¹ Fliedl, Konstanze / Wagner, Karl (Hg.): *Peter Rosegger – Ludwig Anzengruber: Briefwechsel 1871-1889*. Wien / Köln / Weimar 1995, hier S. 27.

² Ebd., S. 30.

以上のように、民衆作家としてウィーンで活躍していたアンツェングルーバーの指摘や、それにたいするローゼンガッガーの返答、さらにはかれの「シュタイヤマルクのアウエルバッハ」³ という異名に鑑みても、かれの文学活動の出発点におけるベルトルト・アウエルバッハ（1812-1882）とアーダルベルト・シュティフター（1805-1868）の影響は、はかり知れないほど大きかったといえる。だがそれ以上にここで興味深いのは、後継者を残すほどの独自の作風を確立したいという若きローゼンガッガーの意気込みが垣間見える点だろう。アンツェングルーバーこそ、かれの良きライバルであったのだから。

ローゼンガッガーは1870年代、農村物語の執筆に本格的に取り組みはじめた。その先駆けとして、田舎の世界を舞台とするこの文学ジャンルが一躍人気を博することになるきっかけを作ったのが、上述のアウエルバッハの『シュヴァルツヴァルトの農村物語（*Schwarzwälder Dorfgeschichte*）』（1843）である。すでに1840年頃には独自の文学ジャンルとして確立していた農村物語は、この19世紀前半の世界的なベストセラーが世に出て以降、さらなる発展を遂げていく。⁴ ただし、アウエルバッハは都市住民の視点にとらわれてはいなかったにせよ、農民たちの生活の真ただ中にならなくてもよかった。そこで待望されたのが、農村世界を生き生きと表現することのできる農民の書き手である。アウエルバッハの革新的な技術が、シュティフターをはじめとするのちの多くの作家たちによって模倣され、引き継がれていくなか、『グラーツァー・ターゲスポスト』の編集長スヴォボダによって見出され、1864年12月13/14日付の当誌で「シュタイヤマルクの自然詩人」と紹介されたのが、オーストリアの地方作家ペーター・ローゼンガッガーだった。

アウエルバッハとローゼンガッガーはともに農村の日常生活という素材をあつかう点では共通しているが、かれらにたいする後世の反応は対極をなしている。ユダヤ系であったために、ナチズムによる受容を幸いにも免れたアウエルバッハの文学とは対照的に、オーストリア国民に生前から熱狂的に受け入れられ、国民作家として祭り上げられたローゼンガッガーの文学は、第三帝国期にはプロパガンダとして利用された。その歪んだ受容は、ナチズムにより評判を落としたために、その後忘却されていった19世紀の農民文学がたどった道のりとも、軌を一にしている。⁵

近年では、あらたなローゼンガッガー像を模索する試みとして、かれの契約先でもあった郷土文学を取りあつかうシュタックマン社から、現代の作家たちによるローゼンガッガー作品にまつわるエッ

³ Ebd., S. 169. (Kommentar)

⁴ Becker, Sabina: *Bürgerlicher Realismus. Literatur und Kultur im bürgerlichen Zeitalter. 1848-1900*. Tübingen / Basel 2003, S. 282f.; Schober, Wolfgang: Nachwort. In: Rosegger, Peter: *Als ich noch der Waldbauernbub war*. Stuttgart 2005, S. 305-314, hier S. 306.

⁵ Zimmermann, Peter: *Der Bauernroman. Antifeudalismus – Konservatismus – Faschismus*. Stuttgart 1975, S. 5.

セー集も出版されている。⁶ こうした昨今の読み直しの一環として、本稿では、同時代の危機的な農業状況を反映したものとして評判になった、かれの作品を代表する中期の長編小説『最後の人ヤーコブ (*Jakob der Letzte*)』⁷ (1888) を取り上げる。本稿の課題を述べるまえに、まずはジャンルの観点から本作の位置づけを確認しておこう。

1. 「農民小説」としての本作の位置づけ

ローゼンガッター作品は、書簡や日記といった体裁をとるものが多いが、内容的にその大半は農民ものである。それは本作の副題「現代の森の農民物語 (*Eine Waldbauerngeschichte aus unseren Tagen*)」からもうかがえる。「農村物語 (*Dorfgeschichte*)」と「農民小説 (*Bauernroman*)」は農民というほぼ同一の素材をあつかうジャンルであるが、19 世紀の作品には前者、19 世紀末以降の作品には後者の呼び名を割り振られていることが文学研究では一般的だった。こうした世紀による概念区分の無効を主張し、1830 年代から第二次大戦後にかけて発展したこの文学を統一的なものとして把握しようとしたのがツィンマーマンである。かれは同時代の社会、経済、政治の発展史を節目となる三つの時期 (三月前期と復古期、帝国期、ヴァイマル共和国と第三帝国期) に区分し、各時期に特徴的な農民小説のイデオロギー的傾向を指摘しながら、その変遷のプロセスを包括的にたどっている。かれの考察によれば、1870 年から 1918 年までの農民小説群を性格づけているのが、郷土芸術運動⁸ と連動した「農村的・保守的 (*agrarisch-konservativ*)」な傾向であり、その大半を占める工業や資本主義を敵視した作品群の代表例のひとつとして、版をかさねたローゼンガッターの『最後の人ヤーコブ』が取り上げられている。⁹

この作品に文学ジャンルの観点とは別の角度からアプローチしたヘルツルは、作家の生前から死後までの受容を非文学的な領域において研究した。かれの見方によれば、「社会的、経済的な枠組み」があるために、本作は、しだいにファシズム前段階にあるイデオロギー的な傾向を帯び

⁶ Vgl. Preitler, Franz (Hg.): *Meine Lust ist Leben. Die Rosegger Anthologie*. München 2011.

⁷ 本稿では以下のテキストを使用し、本文中の括弧内に頁数で引用箇所を示す。Rosegger, Peter: *Jakob der Letzte. Eine Waldbauerngeschichte aus unseren Tagen*. In: *Gesammelte Werke*. 4 Bde. Bd. 2. 3. Aufl. Hg. v. Jost Perfahl. München 1993, S. 387-657. なお、本作の注釈は、この選集版のもの (ebd., S. 664-667) を使用した。

⁸ 近代化ともなって生じた農業危機が深刻化していく 1890 年代以降、郷土芸術運動と呼ばれる反近代的、民族主義的、全体主義的、部分的には反教会的な傾向をもつ文化潮流がひろまった。Rossbacher, Karlheinz: *Heimatkunst der frühen Moderne*. In: Mix, York-Gothart (Hg.): *Naturalismus. Fin de siècle. Expressionismus 1890-1918*. München 2000, S. 300-313, hier S. 300. この潮流の担い手によってその主張が異なる点を強調し、「保守的な文学者や文学理論家らによる集合的な試み」として郷土芸術運動をより大きくとらえたものとしては、ツィンマーマンの論文を参照。Vgl. Zimmermann, S. 54-68.

⁹ Ebd., S. 48-124, bes. S. 68-83.

てくるローゼンガッガーの後期の作品とは区別されている。¹⁰

他方で、ローゼンガッガーとタグを組んだ出版社との関係から各時期における作品の傾向をあきらかにしようとしたのが、ヴァーグナーである。本作が農業問題にかかわる立場の異なる陣営から幅ひろく受容されたという経緯を示したかわい、作者ローゼンガッガーの同時代の農業政策にたいする意識的な関与を認めるものの、この問題にたいしては現実的な解決策を提示するまでにはいたっていないことを理由に、本作を道徳的な「範例物語 (Exempelgeschichte)」¹¹ だと性格づけた。この見方は、当時の社会状況が反映された点にローゼンガッガーの農民小説の意義を見出したツィンマーマンにも共通している。

ローゼンガッガーの『最後の人ヤーコブ』が発表された 19 世紀後半のドイツ帝国期には、じつに傾向の異なる農民小説が幅ひろく混在して出回っていた。悲惨な農業状況にスポットライトを当てて、農民気質の強化や農業への回帰を説く保守的なものもあれば、1890 年代以降このジャンルの人気をさらに高めた、市民的な視点から描かれた農村からの離反を主題とするリベラルな作品もあったという。そのなかで圧倒的な人気で当時の売れ筋の上位にランクしていたのが、恋愛のような娯楽的要素を織り交ぜながらアルプスの農民の健全さを謳ったルートヴィヒ・ガングホーファー (1855-1920) の楽観的な「高地小説 (Hochlandsroman)」だった。¹² こうした受容史から逆算すると、作品の主題や問題提起、筋の展開において、農村的な保守性を全面に押し出した趣向のものが、とりわけ都市のリベラルな読者層の理解を得るのは難しかったのではないかと考えられる。¹³

従来の研究では、『最後の人ヤーコブ』は同時代の危機的な農業状況を反映した作品ではあるものの、現状の現実的な解決策の提示までにはいたっておらず、最終的には農民の道徳にかんする問題に回収されてしまう物語であるという見方がなされている。しかし、本作に出てくる「アメリカ」という場所の設定に注目することで、ローゼンガッガーがその解決策を模索する真ただ中にあったことが分かるだろう。そもそも本作においてアメリカは、故郷を手放した主人公の息子が農民として再出発をする場として設定されている。とはいえ、ローゼンガッガーにとって故郷以外の土地における農業再開は、故郷を蔑ろにする行為として回避されるべきものであった。その場合のアメリカというトポスは、生まれ故郷の維持か、あるいは他国での農業回帰かという二者択

¹⁰ Hölzl, Wolfgang: „Der Großdeutsche Bekenner.“ *Nationale und nationalsozialistische Rosegger-Rezeption*. Frankfurt a. M. [u.a.] 1991, S. 220-223. ただし、自然的かつ理想的な農村共同体像が調和的な民族共同体にすり替えられることで、民族主義的な解釈を許容してしまう危うさもまた本作にはあるという。

¹¹ Wagner, Karl: *Die literarische Öffentlichkeit der Provinzliteratur. Der Volksschriftsteller Peter Rosegger*. Tübingen 1991, S. 273.

¹² Vgl. Zimmermann, S. 66, 103-114, 122f. 保守的な傾向の作品部門では、ローゼンガッガー作品は売り上げ上位に入っている。

¹³ Ebd., S. 122.

一を迫られたさいに作者が下した決断の結果でもあるだろう。アメリカ移住が当時の農村共同体の崩壊と密接にかかわる現象だったという事情をふまえながら、現実的な意味をもちえなかったこのアメリカというユートピアが本作で選ばれるにいたった経緯をたどることで、同時代の農業状況にたいする作者の立場をあきらかにすること、それが本稿の課題である。そこでまずは、作品成立の経緯にかんするローゼンガターの発言から見ていきたい。

2. 規範の体現者——同時代に抵抗する父ヤーコブ

長編小説『最後の人ヤーコブ』は1886年の夏から秋にかけて執筆された。同年の秋、ローゼンガターは、物語の完成をスヴォボダに宛ててこう報告している。「それは小農民の敗北、そして故郷にたいする愛情からその土地を離れることができなかったひとりの農民の没落の話です。まずは『ハイムガルテン (*Heimgarten*)』誌で掲載がはじまることになるこの物語は、大地主や狩猟好きの連中をほんとうに激昂させてしまうでしょう。そんなことは、私にしたらたいしたことではありません。今日あらゆる世界から姿を消してしまったその身分の人たちのために、私はもう一度言葉を発したいのです」。¹⁴

こうして誕生した、山岳地域アルテンモースに住む農民の没落を主題とするこの物語は、作者自身が創刊した上記の雑誌に1887年の1月から7月にかけてはじめて掲載された。そして同年のクリスマスの時期に単行本としてウィーンのハルトレーベン社から出版されるさい、本編には序文が添えられた。その書き出しはつぎのようである。

本作には、ただ楽しませる以上の深い意味がある。ここでは現代に顕著で重要な現象を記述し、我々のアルプスにおける農民の没落図を提示しなければならない。それは農民にかかわることなので、ほとんど私個人に関係しているように感じており、そのようにして私の心は本作の執筆に臨んだ。これは悲劇的な現実の一片である。詩人 (*Dichter*) はただ情景をならべて仕上げ、とりわけ荒野や廃墟に咲くわずかな花を愛情こめて育てなければならなかった。(389)

この序文の冒頭は、前掲の手紙で述べられた作者の執筆動機とも内容的にかさなっている。だが第一にここで述べられているのは、本作が「ただ楽しませる」だけの読み物ではないことである。それは当時人気を博していたほかの娯楽的な農民小説への当てこすりなのだろうか。

そこでいったん、本作の下敷きをなしている当時の時代背景を見ておくことにする。近代に入

¹⁴ 1886年10月15日付のスヴォボダ宛ての手紙。Zit. nach: Wagner, S. 260.

り、社会は構造的、経済的に大きく変化を遂げた。なかでも大都市の誕生とともに、都市と田舎との関係も変わり、1848年、農民は領主から解放されて精神的な自由を手にした。だが同時に、土地使用料や税金の支払い義務が課せられたかれらは、負債をかかえる不自由な身となってしまったのである。¹⁵ 他方で1854年には鉄道が開通し、安価な外国産の穀物が流入しはじめた結果、山岳農民の農業は生産面においてそれに太刀打ちできなくなっていく。選集版の注釈においてはさらに、1868年の長子相続権の廃止、嫡子兵役免除の廃止、シュタイヤマルクの工業化、狩猟への土地改良等といった当時の社会事情が指摘されている。¹⁶

上記のような時代背景をもつ本作は、二部構成（第一部は15章、第二部は17章）をとる。時系列にしたがいながらも、各章は独立した逸話からなり、解体していく農村共同体やプロレタリアとなった農民の悲劇的な末路が、主人公である小農民ヤーコプの視点から再三にわたって描かれている。その概略をまとめれば、おおよそつぎのようになるだろう。

貨幣経済という時代の波に追従できなくなった農民たちは、かつて金銭とは代替不可能なものだった先祖代々の家や土地を売り払い、故郷を去っていく。隣村の移住先におけるかれらの好スタートも、見せかけであるにすぎない。たとえば、よりよい現金収入という謳い文句に惹かれ工場労働者となるも、酷使されたあげく不慮の事故に見舞われる者、犬以下の冷遇を受ける下僕、土地と引き換えに手にした現金を散財してしまい、地代の滞納ゆえに土地を追われて零落していく者等々、作中で描かれる故郷や家にたいする不実がもたらす弊害の事例は、枚挙にいとまがない。

こうした現象に拍車をかけるのが、ハンガリーの穀物納入業者の跡取りである。億万長者のかれは村全体の買占めをたくらんでいるのだが、作中に姿を現すことはほとんどない。¹⁷ あらたな時代において農民の存在意義を否定するこの不可視の人物は、資本主義経済の体現者として不気味な存在にとどまっている。かれの手先として登場し、主人公と敵対関係にあるのがポーランド人の森林官である。悪魔との契約を思わせるかたちで、かれは農民たちを誘惑していく。その結果、かれらが捨てた農地はしだいに荒廃がすすんで森となり、野生動物の保護を名目とした狩猟地、すなわち富裕者の娯楽の場に改造されていく。

こうした物語世界を念頭に置いたうえで、以下では、物語の保守的な基調をなす主人公に注目

¹⁵ Vgl. Anderle, Charlotte: *Der andere Peter Rosegger: Polemik, Zeitkritik und Vision im Spiegel des „Heimgarten“ 1876-1918* Wien 1983, S. 197.

¹⁶ *Gesammelte Werke*, Bd. 2, S. 664-667. 選集の編者ペルフェールが注釈で指摘と照らし合わせた作品分析として参考になるのが、神野ゆみこ「『ゲマインデ』の夢と現実——ローセガーの『森の先生の手記』と『最後のヤーコプ』を中心に」：日本オーストリア文学会『オーストリア文学』13号（1997年）、17-24頁所収。

¹⁷ Vgl. Zimmermann, S. 74. 商業や工業化を敵視する保守的な農民小説において、それは典型的な敵の姿だったという。

しよう。舞台は山岳地域にある農村共同体アルテンモース。草をはむ家畜の群れの輪舞、ほとんど空中で吹き消される小鳥のさえずり、細い谷底から聞こえる夢のようなサンダッハ川のせせらぎ——このような牧歌的な風景に、物語の舞台は囲まれている。ただし自然災害に見舞われることの多いこの地域では、よりよい仕事や生活環境を求めて家や土地を売却し、隣村へと移住していく村民が跡を絶たない。かれらの離村や離農に歯止めをかけようと奔走し、時代に抵抗しつづけることになるのが、主人公の小農民ヤーコプ・シュタインロイター (Jakob Steinreuter) である。

かれの先祖代々の家ロイトホーフはアルテンモースを一望できる丘にあり、そこには聖ヤコブ像をおさめた礼拝堂が隣接している。これらに比肩するかれの無比の財産であるのが、「ヤーコプ」という「名前」だった (406)。「世代から世代へと編まれ、各々のヤーコプ・シュタインロイターをその祖先と大地とに密接にむすびつける特別な絆」であるこの名がすでに、旧約聖書におけるイサクの子ヤコブを連想させ、主人公の族長的な性格を代弁しているように、かれは妻子や下男下女を支えるロイトホーフの「家長 (Hausvater)」 (394ff.) と語り手に呼ばれつづける。

物語前半の第一章では、主人公ヤーコプの大地との密接なむすびつきが強調される。¹⁸「農民一族 (Bauernstamm)」 (486) を自認するかれは、「自分の立つ大地から、その活力や心配事、そして愛を引き出して」おり、「いつも種をまく人であると同時に、収穫する人、正直な人であるが、謙虚な人」と形容される (395f.)。さらに、かれの先祖であるシュタインロイター家の者の不幸にたじろぐことのない姿は、「嵐にたいして踏みとどまるモミの木」にたとえられ (486)、同様にヤーコプの人間観についても、「立派で、実直で、確固たる誠実な人間は、樹木や穀物となんら違わずに、どこかに根づいて (wurzeln) いなければならぬ」 (466) と述べられているように、作中では人と自然とを同一視する描写が散見される。

動植物のメタファーとならんで本作を特徴づけているのが、宗教的な表現である。¹⁹ 人と大地との関係には、自然らしくかつ厳かな性格があたえられ、人も自然とおなじく死と再生、四季といった神の秩序のなかで生きる存在であることが暗示される。第二部第9章でヤーコプが夢想する以下の場面では、その章題「聖なる穀物畑 (Das heilige Kornfeld)」も暗示するように、農業に従事する自身の姿が、宗教的な表現を交えて描かれている。

かれは自分の耕地を愛していた。それが可愛くてならず、耕作 (Bearbeitung) はかれ

¹⁸ 大金を手にして移住していく隣人の後ろ姿を見送りながら、父ヤーコプは「土 (Erdscholle)」を一掴みして、次男のフリーデルに「坊や、これが僕たちの数千マルク (Tausender) なんだ」と説く (412: 強調はローゼンガール)。ここでは「土」が農民にとって価値あるものだと言われる。

¹⁹ Vgl. Hölzl, S. 222; Wagner, S. 272; Zimmermann, S. 73.

にとって礼拝 (Gottesdienst) を意味していた。

かれが種まき人として耕地に歩み出て、穀物を地面のうえにまくとき、それは聖なる儀式 (eine heilige Handlung) を執りおこなうかのように真剣で、ほとんど厳かな方法でおこなわれた。そうするとかれの目のまえではしだいに、神の愛による奇跡 (das Wunder der göttlichen Liebe) が起こりはじめた。苦しみ、希望、ひそかな悲しみをかかえたこの人は、種の復活 (Auferstehung) を見ることにすばらしいことなど、なにも知らなかった。(591)

ヤーコブ自身の願望が投影されたこの場面では、描写の速度が急激に落とされ、作中ではもっとも持続的に風景描写がなされている。しかしながら「ヤコブのはしご」(594) を昇り降りするかのような気分で、かれが黄金色の穀物畑を夢想していたときには、アルテンモースはすでに解体寸前にまで追いつめられていた。

この理想化された現実描写は、農民小説の特徴でもある。体験可能な現実世界を主観にもとづいて美的に解釈して描く「美化 (Verklärung)」の手法によって、現実社会のかかえる矛盾は覆い隠されていく。²⁰ この美化の手続きにかんしては、前述の序文においてすでに、「詩人はただ情景をならべて仕上げ、とりわけ荒野や廃墟に咲くわずかな花を愛情こめて育てなければならなかった」と述べられていた。殺伐とした現実の情景のなかにも美しい「花」を見つけ、それを枯らさぬよう「愛情」を注ぐことが、詩人の使命だと語られる。「悲劇的な現実の一片」という本作を執筆するさいの心得を明記したこの序文は、社会の暗部をクローズアップして描く自然主義への対抗意識にもとづいているという点で、語り手とおぼしきローゼンガッターがいかに現実を理想化されたかたちで描くことに意識的であったか、ということをもうかがわせる。

たしかに、農村共同体の過去は「主人も奴隷も、富める者も貧しい者もないのがアルテンモースらしきだった」と理想化されて、ヤーコブの脳裏によみがえっていた (510)。ただし直後の

²⁰ 「美化」の筆跡は、リアリズム、農村物語、農民小説に共通した特徴である。美化の度合いがつけめられ、イデオロギーに傾斜した文学とみなされるのが、農民小説を中核とする「郷土文学 (Heimatliteratur)」である。上記の諸ジャンルの相互間の相違について、ここで深く立ち入ることはしないが、郷土文学とリアリズムの相違点についていえば、前者にはユーモアの欠如、綱領や民族主義的な傾向、異なる郷土概念が認められるという。Rossbacher, Karlheinz: *Heimatkunstabewegung und Heimatroman. Zu einer Literatursoziologie der Jahrhundertwende*. Stuttgart 1975, S. 133; Becker, S. 102-110, 125, 282-286. ロスバッハーが「歴史的に郷土芸術運動の文学と規定される」もの、つまり郷土文学という文学史上の「郷土芸術 (Heimatkunst)」(オーストリアでは「地方芸術 (Provinzkunst)」) とみなしているローゼンガッター作品には、『大地の恵み (Erdsegen)』(1900) がある。Vgl. Rossbacher (2000), S. 302, 310. なお前述のヘルツルは、上記の作品にくわえて『永遠なる光 (Das ewige Licht)』(1897) と『俗世の害毒 (Weltgift)』(1903) を挙げている。Hölzl, S. 219.

かれの台詞では「今や […] ああ、[…] かれらは俗世の害毒 (das Weltgift) をあおつてしまったのだ」とあるように (ebd.: 強調はローゼンガッー)、搾取も支配関係も存在しない理想的な平等社会を引きあいに出すヤーコブのレトリックは、同時代の社会の現状を告発するために用いられている。それが証拠に、かれを「血を吐く思い」(ebd.) にさせた隣人らの軽率な行為、つまり先祖の家や土地の売却や離村にみる現代という異常現象は、かつて村で猛威をふるった疫病と同一視されて、「移住の流行病 (Auswanderungsseuche)」(495)、「移住のペスト (Auswanderungspest)」(484) 等と表現されている。

現状にたいするヤーコブの診断は、作中におけるかれとは対照的な所見によっても強調されている。物語の前半部では、おもに移住後に没落していく農民たちの姿がヤーコブの目線から描かれる一方で、後半部の描写の中心は、かれの家族にうつる。妻は事故死を遂げ、娘夫婦は行方不明となり、兵役にとられた次男の息子は戦死してしまった。立てつづけに家族の不幸に見舞われたヤーコブに「慰めの言葉」をあたえようと訪ねてきた隣村の司祭は、時代にたいする見解をつぎのように述べている。

人類に生じているのは、自然の暴力をともなった変化です、いわば四季の移り変わり、海の引き潮や満ち潮、アルプスの氷河が前後する動き、地震や火山の爆発のようなものです。それが良いか悪いかを問うこともできるでしょうが、人はそれを黙ってみているしかありません、それを避けることはできないのですから。(566f.)

病の比喩を用いて同時代の現象を克服可能なものとみなしていたヤーコブとは対照的に、司祭は、自然の比喩を交えて時代の変化にたいする人間の無力さを説く。かれの「慰めの言葉」に感情を逆なでされたヤーコブは、諸々の変化に逆らうことのない教会側の使命感の欠如を非難し、こう反論する。

前代未聞なことが起こって、人々が自分たちの故郷にたいして不実になるときに、どうして教会では大声をあげないんですか。[…] 私は毎日曜日、農民たちにこう大声で呼びかけたい、おまえは自分の父の土地を敬い、捨ててはならないんだ、と。——土地への固着、定住性 (Die Heimständigkeit, die Seßhaftigkeit)、これらのかすがいが緩んでしまうと、あらゆるものがすっかり羽目を外してしまう、それをあんたがたに言っているんだ。(568: 強調はローゼンガッー)

ここでかれは進歩を盲信する時代の風潮にたいして警鐘を鳴らすだけではなく、移住の病にた

いする抵抗力をつけるための言葉、すなわち、失われつつある故郷への忠誠や「家の永続性、定住性」を呼び覚まし、農民の階級意識を高める言葉の必要性を主張する。こうした主人公ヤーコブの時代の趨勢にたいする抵抗者としての姿勢は、自由主義者でありながらも、技術や進歩にたいしては懐疑的でありつづけた作者ローゼンガールの見方にも通じる部分だろう。かたや司祭の台詞では、時代の変化などは自然の比喩に頼ることでしか表現しえないにもかかわらず、移住が時代にそくした行為として正当化されている。かれはヤーコブが美德だとみなす「父たちにたいする心服」を「不利益をもたらす」ものだと否定し、厚顔にも教訓的な口調でつぎのように述べていた。「ロイトホーフの最後の人ヤーコブ (der Letzte Jakob) は、その祖先たちに値しない終わりをむかえることになるでしょう。[...] 友よ、人は人のためにあるのです。生きている仲間よりも冷たい土くれを愛するなど、大それている。人の胸中が私たちの故郷 (Heimat) なのであって、この世界にそれ以外の故郷はないのです。ヤーコブよ！ あなたがとても大事にしている大地を手放すのです、大地を休ませてあげなさい」と (568f)。

ヤーコブには、この世における故郷などなかったのだろうか。かれにとって故郷とは「神が私を定めた場所 (wo mich Gott hingesetzt hat)」だった (587)。さらにかれが「ロイトホーフの人 (Reuthofer)」、「アルテンモースの人 (Altenmooser)」や「シュタイヤマルクの人 (Steirer)」という空間的に規定されたアイデンティティをもつことから、故郷は自己の生存の起点となる出生地であるアルテンモースを具体的に指し、なかでも先祖代々つづくロイトホーフという、ヤーコブと情緒的にむすびついたきわめて限定された空間を意味する。逆に、これ以外の場所は距離を問わずに「外 (draußen)」と呼ばれている。それゆえ、かれにとって生まれ故郷を捨てること、見知らぬ土地で死ぬこと、それらは罪にほかならない行為だったのである。

序文で述べられていたように、「花」としてのヤーコブの人物造形に「愛情」を注いだ語り手ローゼンガールも、それを貫徹させることはできなかったように思われる。次章では、その綻びとみなしうるヤーコブの長男のアメリカ移住と、ヤーコブ自身の最期を検証していく。まずは、父の行為を疑問視する視点を読者にあたえるその息子の考察からはじめよう。

3. 規範の侵犯者——故郷から疎外されたヤッカール

ヤーコブ・シュタインロイターの (名を継ぐ者であれば) 誰にでも共通する両親や郷土への心服 (die Anhänglichkeit an Eltern und Heimatserde) といった特徴が、じつにまったく欠けていて、父の家を蔑ろにして不実にも見捨てることのできた反抗的な少年——それはほんとうにアルテンモースの子だったのか、取り替え子ではなかったか？ (466: 括弧内の補足は執筆者)

このヤーコブの台詞で述べられている家出少年が、父とおなじヤーコブという名前をもつ長男のヤッカール (Jackerl: Jakob の指小形) である。語り手からも「腕白坊主 (Wildfang)」(401, 412) と呼ばれつづけるかれは、ロイトホーフのお仕置き部屋となっていた貯蔵庫に閉じ込められたとき、こう言い放っていた。「出ていきたい。もうこんなアルテンモースなんかにはいたくない。僕は世界が見たいんだ。だからみんなは僕を閉じ込めた。お願いだから、出して！」と (444)。この直後の森林官の応答も興味深いのだが、²¹ ここでは、12 歳の少年ヤッカールにとって両親の家が牢獄にひとしい閉塞感のある場所だったという指摘にとどめておく。

数章あとの第一部第 9 章「ヤッカールは天使になった」において、行方不明になった息子の葬儀が聖ヤコブの日に執りおこなわれたさい、「かれの霊よ、安かれ！」という司祭の祈りにたいし、父は「あいつには生涯、場所 (Statt) などなかった、死後にもない」と反論する (466)。本章のはじめの引用でも示したように、「従順 (brav)」とはかけ離れた性格のヤッカールは (407, 435)、父にとっては「ろくでなし」であり、「根なし草 (entwurzelt)」的なユダヤ人にひとしい異質な存在だったのである (466)。²²

このとき、かれの本質を見抜いていたのは、その親ではなく幼い妹や弟だった。「荒くれ」ヤッカールとは好対照をなす「穏やかな」(407) 次男のフリーデルに、妹アンガールはこうささやく。「荒っぽい鳩もいるように、荒っぽい天使だっているかもしれないね、もし天国にいるヤッ

²¹ 父ヤーコブの頑なさを問題視する森林官ラディスラウスは、ここぞとばかりにヤッカールの立場に寄り添い、少年の精神的な自由を求める態度を、時代の趨勢にふさわしい反応だと解してこう述べる。「若者は時代を理解している。かれらは山岳地方の片隅に力づくで閉じ込められている。力づくで！ それからかれらはもちろんしやがみこんだまま体が鈍っていく。それが郷土愛 (Heimatliebe) と呼ばれている！ [...] あいつがおまえをお仕置きしているあいだ、おれがあいつの首を絞めてやろう」(444)。

²² ローゼンガーが反ユダヤ主義者だったかどうかについては、議論が分かれている。この場面における「永遠のユダヤ人の運命 (Geschicke des Ewigen Juden)」という表現は (この地の文の主語は、単数の「アルテンモースの農民」であり、直前のヤーコブと、この地域の農民の総称という二通りの解釈が可能である)、「確たる大地と拠り所をもたない浮浪者 (Stromer)」、「放浪者 (Vagabund[en])」(466)、「ジプシー (Zigeuner)」(464) とおなじく、息子の出奔を非難する父ヤーコブのレトリックである。作中にユダヤ人は登場しないが、ユダヤ人とみなしうる人物としてフィリップが指摘するのが、「立派な赤い顔貌」(433) をもつポーランド人の森林官ラディスラウスである。Philippoff, Eva: *Peter Rosegger: Dichter der verlorenen Scholle*. Graz 1993, S. 143. そう仮定するならば、かれが敬虔なキリスト教徒のヤーコブと対立する人物であることから、ユダヤ人にはネガティブな表象があたえられているといえるかもしれない。ただし、これが作者の個人的な立場なのか、あるいは世間の見方の反映なのかについては、より慎重な議論が必要だろう。作者ローゼンガーの政治的姿勢にかんしていえば、本作におけるヤーコブの発言 (487) が示唆するように、かれは反ユダヤ主義をかかげた当時のラディカルなドイツ民族主義指導者シェーネラーとは距離をとりつつも、大ドイツ主義的な立場をとっていたとされるが、そこには、民族意識に目覚めた他民族の脅威にたいして帝国領内のドイツ人が抱ける敵視の目を逸らす狙いがあったのだ、とヘルツルは述べている。同時に、ローゼンガーは、ドイツ文化の保護を目的とした教育機関の創設のために、『ハイムガルテン』誌に数誌で寄付を呼びかけた。こうした資金調達活動は、言論上では曖昧だったかれの政治姿勢を裏づける証拠とみなされている。Vgl. Hölzl, S. 11-14, 222.

カールに翼があれば、どんどんすすんでいく必要はないし、突き抜けて飛んでいけるのに」(467: 強調はローゼッガー)。狭い教会の天井を舞うツバメに、暴れん坊の兄の姿をかさねて見ていた妹の感傷的な空想は、物語の筋の展開を先取りしている。事実かれは、かつて隣人も「荒廃した墓場」(421)と呼んだアルテンモースを脱出し、ほんらい備わっていた「翼」で渡米することになるのだから。

3. 1. 不穏な移住——ヨセフのアメリカ便り

農村共同体アルテンモースの崩壊と並行して、父ヤーコブの家長としての性格はしだいに後退していく。そして息子ヤッカールのほうは、生来のヤコブ的な属性をつよめながら別の属性を開花させていく。父にはない息子に固有の第二の属性とはなんだろうか。それを暗示させるのが、とある修道士から娘のアンガールが聞いた旅の話である(584)。このカプチン会修道士は、エジプトでドイツ語を話す「ムーア人」(ebd.)のような男に出会い、かれからアルテンモースに住むヤーコブ・シュタインロイターやその家族の安否を尋ねられたのだという。エジプトに知り合いがいまいいかどうかを質問した娘のアンガールに、父ヤーコブは「誰ひとり知らないが、それは聖書のエジプトのヨセフだろう」と答えた(ebd.)。この「ムーア人」ふうの男がほかならぬヤッカールであったとするならば、父とは異なる人生を歩むようヤッカールを突き動かしたのは、文字通りヤコブを父にもつ旧約聖書の人物、ヨセフの属性ではないだろうか。

故郷をひとり離れて渡米したヤッカールの姿は、父の住むカナンから離れた異国の地エジプトで宰相として生きたヨセフを連想させる(創世記 41 章以下)。ヤーコブも娘との会話を「それはきっと、全世界に散っていった移住者のひとりだろう」とむすんでいたが(584)、この場面に織り交ぜられている聖書モチーフは、移住のエピソードへの接続となっているだけではない。ヤッカールがヤコブという族長的な属性にくわえて、故郷とは別の土地で栄光を手にしたヨセフの属性をも兼ねそなえた人物として設定されることで、あらたな故郷の創設の礎が築かれているのである。

ヨセフとヤッカールの類似点はほかにもある。この「ムーア人」らしき男が自分の正体を明かさないうまま、ロイトホーフやその家族らの安否を修道士に尋ねたというくだりは、飢饉の際に食糧を求めてエジプトに向向いた兄弟たちにたいし、それと知りつつも、カナンにいる末の弟ベニヤミンを連れてくるよう真っ先に命令したヨセフの対応とも似ている(42 章)。ヨセフは末の弟との念願の対面を果たしてはじめて、兄弟たちを食事に招いて手厚くもてなし、それまで隠していた自分の素性を兄弟たちに明かして、父の安否を尋ねた(45 章)。それは「世界」を見るという願望を果たしてから、一通の手紙の書き手として自分語りををはじめることになるヤッカールの姿にも似てはいないだろうか。それを読む父ヤーコブもまた、エジプトの宰相が弟だと知って驚

いた兄弟たちのように戸惑いを隠せない。²³ というのもこの手紙をきっかけに、とうに死んだと思われていた我が子の生存も、同時にあきらかにされるのだから。

その手紙は、「移住の流行病」に感染して落ちぶれてしまった元大農夫によって届けられる。その直前では、窓から吹く風によって聖書の「放蕩息子」の章がひらかれていた。「どんな放蕩息子がヤーコブには関係するとか？」とかれの内面をのぞく語り手のコメントも (642)、この場面を読み解く手がかりとなるだろう。このヤッカールの手紙は、物語のクライマックスの前兆として、最終章の直前に挿入されている。それによれば、かれはアルテンモース出奔後、インドやアフリカをながらく放浪し、船乗りとなってアメリカにたどり着いてからは、サンフランシスコやカリフォルニアを旅して、金鉱を掘って生活していたという。まずは「父さん！」という言葉ではじめるこの手紙の書き出しから見ていこう。

私の近況をこれほどまでに何十年もなにひとつお知らせしていなかったこと、幾重にもおわびします。自分の境遇のよくないあいだは、落ちぶれたというよりかは死んでしまったとみなして下さっていたほうがよいだろうと思っていました。そして、私には恥じらいと反抗心がありました。おそらく私はひどい状況にあり、立派な両親と愛すべき故郷からの出奔 (mein Davonlaufen von den guten Eltern und von der lieben Heimat) を厳しく贖わねばならなかったのです。[…]

[...] ゴールドラッシュが私を襲ってきました。金、ただ金 (Gold, nur Gold) のことしか頭にはなく、それ以外のことなどもはやなにも考えずに、私は自分の名前をジャック (Jaques) と書いていました。それは私にとって、キリスト教精神すべてを、隣人愛のすべてを忘れてしまっていたもっとも嘆かわしい時代でした。激しい欲望のあまり、私は骨までやつれていたのです。(649)

故郷からの脱出、両親や故郷への不実、過剰な金銭欲のあまりキリスト教精神を失ったこと等にたいして罪意識を抱いたヤッカールは、その後、金権支配の横行する場所からシエラネバダ山脈の伸びる内陸の山岳地域へと移っていった。そこで「故郷のアルテンモース (uns[er] Altenmoos daheim) にほとんど比肩しうるほど」のゆたかな自然のある峡谷を見つけ、居住の地と定めたことが報告される (ebd.)。ここで注目すべきは、共同体の建設にさいして直面した過酷な現実

²³ ヤーコブに衝撃が走る瞬間の様子は、つぎの引用からもあきらかである。「その手紙は、まったく見知らぬ者の筆跡によって、しかも自身の名前までもが書かれている。かれの知るかぎり、もうひとりのヤーコブ・シュタインロイターなど存在しない。——オレゴンの新・アルテンモースから。それは一体どこなのか？——手紙は『父さん！』とはじまっていた」(648)。

を、かれが宗教的イメージを借りて解釈し直している様子である。

悲惨な農業を営みはじめました。それがどれほどつらくて骨の折れることなのか、それを書き記すことはできません。天地創造後の最初の人のように、私たちははじめなければなりません。荒野を開墾することがどんなに困難なことか、誰も信じることはできないでしょうが、私はしばしば考えたのです、それは自分が故郷を不実にも立ち去ってしまったことにたいする罰（Strafe）なのであり、いまひどい苦しみでもって、さらに悲惨なそれ（故郷）をひとつ創らねばならないのだと。[...] ひろい世界をさまよい歩くことに私はうんざりしています。ひとつの場所（eine Stadt）がほしいのです。森林を切りひらき、家畜を飼いならすこと、原種の果樹を改良し、冬や嵐、敵意にみちた奇襲から小屋を守ること、そのさいあらゆる病や欠乏に苦しむこと——私はしばしば絶望状態にありました。

しかし私たちは絶え間なく働きつづけ、数年後には、自分たちは故郷にいる（Wir sind daheim）、といえるほどになっていました。[...] 我が家をロイトホーフと名づけ [...] この谷は新・アルテンモース（Neur-Altenmoos）と呼ばれています。[...] 数々の先例にならい、新・アルテンモースの自分が、最初の人ヤコブ（Jakob de[r] Erstel）と呼ばれることを望んでいるのです。（650f: 括弧内の補足と強調は執筆者）

かれの数十年間分の人生が要約された「188* 年」時点における「履歴書」（651）の末尾では、エジプトのヨセフとおなじく、父ヤコブにたいする歓迎の意が述べられ、オレゴンの新・アルテンモースまでの旅程や交通手段、住所までもが記されていた（創世記では45章9節以下に対応する部分）。だが、息子たちによる「あらたな故郷」への呼び寄せにたいする双方の父の反応は、対極をなしている。創世記のヤコブが息子ヨセフの治めるエジプトに赴き、かれを祝福するのは対照的に、父ヤコブはヤッカールの意向を無視するどころか、憤激のあまり息子一家を連れ戻そうとアメリカ行きを決心する（653）。つまり、ヤッカールが試みた父との和解は失敗に終わったのだ。この決定的な相違は、ここまで暗示されていたかれと聖書のヨセフとの一致の可能性を否定し、かれのアメリカでの成功にたいする不安を読者に予感させるものなのである。

さらにヤッカールは、語り手がたとえてみせた聖書の放蕩息子とも異なり、父のもとに帰郷することもない。代わりにかれは、語る権利を剥奪されていた幼少期とは異なり、手紙の書き手として父のまえに登場するのである。ここで注目すべきは、まるでかれが改心を遂げて真の信仰をもつようになったかのように、市民ではなく（父とおなじ）農民としての道を選ぶ点だろう。旧世界における命名の仕方、農法や慣習等の遺産はそのまま踏襲され、かれは父好みの「従順な」

娘と結婚したのち、旧世界からのほかの移住者と身を寄せあいながら、ドイツ文化の保護を意識した生活を送っていることが、誇らしげに報告されている (650f.)。その極めつけが、文末の「ヤーコプ」という署名だろう。これが物語っているのは、父が重視していた名前という「祖先の鎖 (Ahnenkette)」へのつよいこだわりだけではない。幼名「ヤッカル」を捨てて父の座につくこと、換言すれば、これまで芽を出すことのなかったヤコブの族長的な性格が、ここでようやく顕在化してきたことを同時に意味しているのである。

ただし、ヤッカールのアメリカでの生活の具体的な内容が、これ以上読者に知られることはない。かれのアメリカ便りは一見すると、土地所有にもとづく共同体の創設が達成されたかのような印象をあたえ、その移住はまた、かれの妹や同郷の移住者たちがたどる零落の末路とは好対照をなしているように思わせる。この部分を神野は「アメリカでの成功」とみなし、作者の唯一の慰めであると述べている。²⁴ ヤッカールの形象が異国における成功者としてのヨセフと完全にかさなりあうように描出されていると解釈するならば、かれの報告は二重の意味において、安泰な先行きを読者に期待させるものということにもなるだろう。

ところが、当時のアメリカ移住の悲惨な現状と照らしあわせたとき、このあらたな共同体が自己完結的な調和のとれた像をむすぶはずのなかったことはあきらかである。これについてはのちほどふれたい。そのまえに見逃してはならないのは、ヤッカールの「書き物 (Schreiben)」が (647)、見せかけの成功談でしかなかったという可能性ではないだろうか。かれが報告した負の側面は初期の移住にともなう障害のみであり、それ以後の新天地での暗部にかんする記述は見当たらない。だが、アメリカ移住の先行きの不穏さは、すでに作中のほかの書き物との関係性においてほめかされている。作中に登場するほかの書き物の多くは、登場人物に災厄を招く要因であったうえ、書かれた内容の信憑性も低かった。²⁵ 書き物に込められたこの暗示的な意味に照らすならば、ヤッカールの新天地における成功も、完全に約束された事実とはならないのである。このことは、聖書のヤコブとは正反対の対応を父ヤーコブがとったことで生じた、前述のヤッカルとヨセフとの相違からも導かれる。ここであらためて、故郷を手放すという行為が作中では例外なく悲劇的な結末をともなっていたことを思い出すならば、「新・アルテンモース」もオーストリア国内におけるアルテンモース以外の移住先となる村の鏡像にほかならない。また「あらたな故郷はかつての故郷よりも気に入るはずです」と婉曲的であれヤッカルに吐露させている点には (651)、

²⁴ 神野、23 頁参照。

²⁵ 窮状を訴える無産農民にたいして帝国の徴税人が突きつけた「督促状」(446f.)をはじめとして、たとえば以下の書き物もまた、物語の展開にネガティブな影響を及ぼしている。亡き長男に次ぐ相続人の次男フリーデルに「徴兵状」が届いたさい、母は「嘆願書」をたずさえて息子の徴兵免除を直訴しようと皇帝の訪問を待ちわびるあいだ、不慮の事故に遭い、数日後には命を落としてしまう (545f.)。また、兵役についてフリーデルの「便り」(578) も偽物だった。

作者ローゼンガターの皮肉めいたものも読みとれなくはないだろう。手紙で描かれた第二のアルテンモースも非現実的なユートピアでしかなかったということは、想像に難くないのである。

原は『最後の人ヤーコブ』における新・アルテンモースを、ローゼンガターの代表作『森の教師の手記 (*Die Schriften des Waldschulmeisters*)』(1874)の主人公アンドレス・エアトマンが人跡未踏の森のなかに創設した共同体とくらべ、より現実離れた空間であると指摘している。²⁶ このような解釈がある一方で、息子ヤッカールの海外移住を、再三描かれる離村や移住の延長線上にある追加的なエピソードという程度にとらえたものもある。²⁷ しかしそのいずれの場合でも、ヨセフにとってのエジプトが栄光の地だったように、ヤッカールの移住先アメリカに肯定的な意味を見出していく可能性は、はじめから排除されていることになる。

一見すると、ヤッカールのアメリカでの共同体創設行為は、国内から国外へと居住空間を移した故郷の再現にすぎないように思われる。だが実際には、そこにさらに別の意味を読み込むこともできるのではないだろうか。このことを考えていく手がかりとなるのが、息子と正反対の態度をとった父の死の両義性である。

3. 2. 安息の場「神の平和で」における父の捻れた最期

野生動物による農作物被害にたいし、ヤーコブは損害賠償を求めるも、その訴えは却下されてしまった。心身ともに憔悴したかれは、アルテンモースの奥座敷「神の平和で (Im Gottesfrieden)」と呼ばれる谷間へと赴く (632ff)。四方を高い岩壁に囲まれたアルプスの風光明媚なこの峡谷には、ヤッカールが命を落とした現場と考えられていた湖もあり、このおなじ場所で、ヤーコブはのちに脱走兵として逮捕されることになる次男フリーデルと再会を果たしていた (464, 595)。物語の筋運びにとって重要なこの舞台から、物語の後半では語り手によって同時代や下界の様子がつぎのように俯瞰されている。

高山と荒野のあいだに位置する都会から離れたこの谷は、ながらく祝福された朗らかな民家だった。外の世界にはしばしば戦争や怒りが、森の国には仕事と平安がある。農民は無頓着に自分たちの健全な生活を享受していた。[...] どの人も生きること喜びを見出し、多くの者が高齢まで生きた。そのとき、利潤欲、立身出世の狂気といったあらた

²⁶ 「新・アルテンモース」を、ほかのドイツのアメリカ小説で描かれてきたアメリカ像と同様に、ユートピアの表象であると指摘したのが、原研二『物語と不在 十九世紀オーストリア小説とミュージル』東洋出版 2005年、172頁。

²⁷ 移住者のたどる不可避の末路としての「死とプロレタリア化」を指摘するツィンマーマンは、その例外として、ヤッカールのアメリカにおける農業のことに言及している。Vgl. Zimmermann, S. 79, 248.

な時代のペストが襲ってきて、人は故郷やその慣習にたいして不実になり、とどまることを知らない世界の不幸へと突進していった。居残ったわずかな人たちは、権力者たちの利己心に押しつぶされた。[...] 神の平和と呼ばれる岩石の谷間では、なにも変わっていない。なおも、最初のヤーコブの時代の頃のである。(633)

自然の障壁によって、人間社会だけでなく歴史や文明からも切り離された「神の平和で」では、「俗世の害毒」も蔓延することはない。この現実離れた安全地帯は、自然の「教会」や「礼拝堂」と呼ばれる、ヤーコブの精神的な拠り所として描出されていることから（634）、失われた過去のアルテンモースを再現している象徴的な空間だといえる。²⁸

描写の速度を急激に上げながら、物語がこの場所で最終局面をむかえる直前、ヤーコブと森林官とのあいだでは決闘がおこなわれていた。ヤーコブは生活苦からやむを得ず野生動物に銃をむけていたのだが、そのとき突然そこに現れ、口論となった森林官にその銃弾は命中してしまう。倒れた森林官を見て、殺人者になってしまったと思い込んだヤーコブは、「追われた鹿のように」恐怖のあまり一目散に「神の平和で」へ逃走し、自殺を遂げた（655）。そしてその遺体は溪谷の真下にひろがる紺碧の湖で発見され、「土をかけて埋められた（verscharren）」（656）。この箇所には、キリスト教徒の弔いを含意する語「埋葬する（begraben）」が使用されていないことから、ヤーコブを「殺人者であり自殺者」（ebd.）とみなす語り手の見解が反映されている。²⁹

なお、主人公の逃走の場面以降の語りの視点人物は、その名を呼びながらヤーコブを追う友人のピッチ焼き職人ナッツにうつる。ヤーコブの死の真相にかんする読者の読みをかき乱すかのように、ナッツは友人の殺人を森林官からの正当防衛だとみなす発言をし、十字架を建てた。その文言でもって物語はむすばれるのだが、かれの死にかんして、ローゼンガー研究の第一人者であるヴァーグナーはこう論じている。「ヤーコブをせめて『神の平和』で救済するよう動機づけるために、この長編小説は無力な暴力性、無力という暴力の印にかんしてどのようなことでもおこなう。それはヤーコブに、ただ道徳的次元においてのみ正義を達成させることができるのである」と。³⁰

²⁸ 世俗権力にまみれた教会にたいするヤーコブの嫌悪が、かれに「吐き気」を催させる鐘の音に仮託して表現されていたのとは対照的に、この場所の川のせせらぎや滝の轟音は、かれを「静けさと孤独のなかで晴々した気分」にし（595）、その失われてしまった自然と人の心とのむすびづきを回復させていた（632）。

²⁹ Vgl. Merzbacher, F.: Art. „Begräbnis“. In: Erler, Adalbert / Kaufmann, Ekkehard (Hg.): *Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte*. Bd. 1. Berlin 1971, Sp. 349-352, hier Sp. 351. メルツバッハーによれば、「教会による葬送は、非キリスト教徒にくわえ異端者、離教者、破門された者、名指しされて禁止を受けた者、悔悛の情のない自殺者、決闘者、公認の罪人や秘跡の輕蔑者には拒まれていた」。

³⁰ Wagner, S. 277.

かれも指摘する通り、ヤーコブの最期は、私利私欲のために農民の生存を脅かす不可視の存在にたいし、他殺という暴力で抵抗した無力な非特権者の姿を印象づけている。このような主人公の没落という主題は、農村的・保守的な農民文学において好まれた主題でもあった。³¹ さらにヤーコブの場合は、かれがみずから命を絶つことで、「移住のペスト」の非感染者として決定づけられるだけでなく、犠牲や名誉を表象する十字架によって、ほかの農民とは差別化されることになる。

しかしこの読解は、主人公ヤーコブにやや好意的すぎるのではないだろうか。たしかに、最終章のタイトルでもあり、そこで執拗に現れる「神の平和 (Gottesfrieden)」という語には、「不可侵の場所」という意味がある。³² そのため「神の平和で」という名の峡谷は、「殺人者」ヤーコブにとっての最後の砦にも似ているのかもしれない。これはヴァーグナーの指摘にも通じる見方である。だが同時に、避難所にもひとしいこの安息の地で、ヤーコブが犯した自殺という罪そのものもまた、見逃すことのできない事実ではないだろうか。主人公から距離をとった見方をすれば、かれの自殺は——それが故郷で死をむかえるという自身の道徳的な信念を貫いた最期であれば、郷土愛に固執するあまり、みずからの生存の可能性にたいして盲目になってしまった者の限界を象徴していると考えられる。このように、父ヤーコブの言動の是非を問い直す余地は、ほかにも残されているのである。

そこであらためて、父に否定された息子ヤッカルルのことを思い出したい。本章をまとめる次節では、ヨセフを想起させるヤッカルル像の考察に立ち戻ること、主人公の多義的な末路に光をあてる。その一端から垣間見えるのは、主人公ヤーコブのためにあらゆる口実を施そうと腐心しながらも、かれを全般的には肯定することのできなかつた作者ローゼンガラーの相反する感情なのである。

3. 3. 移住者が示すもうひとつの故郷観

故郷とは別の土地で、ヤッカルルは農村生活を送った。作中におけるこの「農業回帰」は、農民小説というジャンルをさらなる人気の座に引き上げた当時のリベラルな傾向の作品と比較すると、旧世界との完全なる断絶も継承も意味しないという点では、革新性に欠けている。³³ だが、

³¹ Zimmermann, S. 67.

³² Grimm, Jacob und Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch*. 16 Bde. Leipzig 1854-1971. 33 Bde. Reprogr. Nachdr. München 1984. Bd. 8, Art. „Gottesfriede(n)“, Sp. 1230f., bes. Sp. 1230. この語は、暴力に頼る自力救済 (フエーデ) を抑制する中世の運動に由来する。特定の期間、特定の場所、ヤーコブのような農民や聖職者といった特定の人間を対象に、教会は自力救済権の行使を制限することを封建身分に誓約させた。なお、ローゼンガラーの他作品においても、この語が同様の意味で使用されている。

³³ 「農業回帰 (Reagrarisierung)」とは、都市的な経験の反動としてふたたび農村へと回帰するモチーフを指

保守的な父とくらべたとき、個人的な素質や好みを優先し、生まれ故郷の空間的な規定から自由になろうとした息子ヤッカールの人物造形からあきらかなのは、この農民への転身が手放しの農村讃美などではありえないということだ。

息子の生き方は、父にたいするたんなる抵抗や反動ではない。前述の通り、かれが抱く外界への憧れにたいする理解が、父ヤーコブには欠けていた。³⁴ 父の発する言葉の抑圧から逃れて故郷を脱出すること、それが当時 12 歳の荒くれ少年ヤッカールに残された「世界を見る」唯一の手段だったということを忘れてはならないだろう。「ヤーコブ」と名乗る書き手になったかれは、生まれ故郷を手放した者の立場から、自己の起点となる場所が出生地以外にも遍在すること、そこに愛や平穏、満足、そして自己実現等を見出し、あらたな故郷を創設しうる可能性を示してみせた。移住者ヤッカールのこうした故郷観は、父の郷土意識の枠組みにおさまるものではない。父にとって幸せを保証する場所は、神との紐帯にもひとしい故郷だった。こうした父の規範的な価値観を問い返しなが、ヤッカールはそれを全否定するのでも全肯定するのでもなく、修正し、拡張させたのである。³⁵ この点に、かれがヨセフ的な属性をもつということの肯定的な意味があるといえるのかもしれない。見方を変えれば、生まれ故郷への執着を取り払い、それを意識化させた息子ヤッカールの反郷土的な態度、それは生まれ故郷をアイデンティティの絶対的な拠り所とみなす父ヤーコブへのアンチテーゼであり、ひいては伝統的な郷土文学にたいする自己反省的な言及であるように思われる。

4. 農民文化の再生のために——「アメリカ」という補償的な場所

旧世界のアルテンモースは失われた理想郷として回顧され、古き農民の道徳を体現する最後の人物だったヤーコブも悲劇的な終わりを遂げたように、作中では伝統的な農民世界の回復がもはや現実的ではないことが強調されていた。³⁶ 前述の内容を念頭に置いて、今度は序文の後半に目をむけてみよう。現在を生きるローゼンガッターはこの世から消滅していく農民の悲劇を愛情こめて

す。他方で、リベラルな傾向をもつ農民小説の主題は、個人や社会からの解放行為としての農業からの離反であった。Vgl. Zimmermann, S. 94-103, 114-122.

³⁴ 疑問視すべき父の息子への対応は、かれの郷土観にかぎられたものではない。「確かに彼は農夫として有能であったかもしれないが、長男ヤッケルの外的世界へ出たいという気持ちに対応した教育ができなかった」とヤーコブの柔軟さに欠けた教育態度を指摘したのが、神野、23 頁。なお、作者はすでに本作の序文において教育の概念をこう定義していた。「教育とは、まずはその人の性格に、第二に生まれつきの能力やその人の職業に合ったものでなければならぬ。教養 (Bildung) があるとみなされる人とは、自分の置かれた境遇に順応でき、近しい同胞を喜びへ、そして自分自身を満足へと導き、自分の義務 (das Seinige) をおこなうことを通じて、自分の道徳にかなった特性を育て上げ、自分の階層を正當に評価できる人間のことである」(390)。

³⁵ Vgl. Zimmermann, S. 120ff.

³⁶ Wagner, S. 209.

描きながらも、古き農民に代わるあらたな農民の出現を期待して、序文をこうしめくくっていた。

すでに今日では毎年、都市から田舎へ、山岳地域への大群衆の押し寄せが起こっている。木の葉が黄色に色づく頃、いずれかれらは自分たちの城壁のなかへとふたたび戻っていくのだが、別の時代も到来するだろう、裕福な都市人 (Stadtleute) が農民の土地を買って農民風に農業をおこない、労働者 (Arbeiter) が自分のために荒野から大地を開墾する時代が。かれらは知ったかぶりをやめて、肉体労働 (körperliche[] Arbeit) に喜びや英気を養う術を見出し、尊敬に値する不動の農民がふたたび存在しうるための法を制定するだろう、そうすれば「無教養の農民」という標語はもはや聞かれなくなるはずだ。
(393)

ここで述べられている都市人や市民の農民への転身という展望は、じつのところ本作執筆以前から『ハイムガルテン』誌であたためられていた構想だった。それは次作『大地の恵み (Die Erdsegen)』(1900)の主題を先取りしている。農民を古きよき伝統や道徳観の保護者とみなしていたローゼンガッターは、かれらの没落を嘆く理想主義者であったと同時に、この序文にも認められるような、「安定したあらたな生存の可能性への移行という、経済的、技術的な進歩の迷宮の真ん中を抜けることのできる細い道」を探していた現実主義者でもあった。³⁷

こうしたローゼンガッターの二面性は、作中における「アメリカ」というトポスの取りあつかいにも表れていると考えられる。また、かれが範としたアウエルバッハの一連の農村物語において、「アメリカ」がこの作家の問題意識とむすびついていったように、³⁸ 息子ヤッカールの移住先として選択された「アメリカ」もまた、それが物語のごく周辺部に出てくるのみであるとはいえ、³⁹ 農民文化の維持、あるいは故郷の創造をめぐるローゼンガッターの関心とも密接に関係している。したがって「アメリカ」モチーフを担うヤッカールについて考察することは、同時代の農業危機にた

³⁷ Anderle, S. 100.

³⁸ 本稿の執筆にさいして有益な着想をもたらしたものに、ドイツ近代文学におけるアメリカ像を数多く紹介した山口知三の研究がある。なかでも山口のアウエルバッハ論では、「調和」と「融和」にみちた牧歌的な物語作家という従来の定説に異議を唱える手がかりとして、1840年代から70年代にいたる作家のアメリカ認識の変遷がとどれている。ユダヤ人だったアウエルバッハの場合、かれが幼なり早い時期から関心を寄せていた「アメリカ」は、宗教的問題と密接に関係していた。山口の論考ではさらに、ビスマルクによるドイツ統一以後に見られる、作家のアメリカ志向からドイツ志向へのベクトルの変化等が指摘されている。山口知三『アメリカという名のファンタジー——近代ドイツ文学とアメリカ』鳥影社 2006年、69-130頁参照。

³⁹ 作中で「アメリカ (Amerika)」という語が初出するのは、ヤーコブと司祭との対話においてであり (566)、アメリカにかんする記述は、主要登場人物としては唯一の海外移住者であるヤッカールの手紙以外では見当たらない。なお山口によれば、渡米経験のなかった当時のドイツ語圏の作家にとって、アメリカ記述の短さは、現地の具体的な描写の手間を省いた結果であった。前掲書、116頁参照。

いするローゼッガーの立場をあきらかにすることにもつながるだろう。結論を先取りしていえば、「アメリカ」は、かれの執筆動機となった問題意識やそこから生まれた展望が行き着く、一応の終着点であると同時に、問題解決への糸口となる出発点として象徴的な位置にあるのだ。

アメリカ移住のモチーフは、「19世紀における伝統的な農村共同体の崩壊過程を強烈に提示する社会現象にほかならなかった」。⁴⁰ 共同体の消滅を主題とする本作の執筆が開始された1886年はまた、第三波（1880-1893）のアメリカ移住熱にわいた時期とかさなっている。⁴¹ 当時、海を渡った人の大半が貧困層の農民であり、アメリカはかれらの夢や希望がたくされるユートピア的な場所だった。しかしその一方で、それらを打ち砕くような現地からの報告や書物によってアメリカにたいする忌避感もおなじく流布していたとされている。

ローゼッガー側の事情に目をむけると、作中でヤーコプの口を借りて説かれているのは、移住や他国における農業再開にたいする絶対的な拒否であり、最優先すべきは故郷にとどまることだった（566）。上述のように、当時アメリカにたいしてはアンビヴァレントな反応があったことから推察されるように、ローゼッガーにとってもこの国は、絶対的な信頼を寄せるに足る場所などではなかったはずだ。そこで問いたいのが、もっとも回避されるべき事態であった他国への移住、それもユートピアにほかならぬアメリカでヤッカールに再出発を踏みきらせた現実主義者ローゼッガーの動機である。

前述したように、かれは本作の執筆にいたるまで、農村離脱やその要因にたいしてつよい関心を寄せており、ジャーナリストとして前掲の雑誌上で発言しつづけていた。なかでもアメリカ移住問題にかんしては、かれは批判的な姿勢を終始貫いていたようである。しかしそれと同時に、かれは農民をあらたに誕生させるための旧世界に代わる場所を模索してもいた。⁴² 旧世界の対極に位置するアメリカは、⁴³ その候補地としてかれの想定圏内にあったのだろうか。本作が世に出てから24年が経った1912年、ローゼッガーは不信感を残しつつも、故郷創設に関連させるかたちで、アメリカ移住のもつ可能性にも注目している。

⁴⁰ 前掲書、84頁。

⁴¹ Vgl. Mikoletzky, Juliane: *Die deutsche Amerika-Auswanderung des 19. Jahrhunderts in der zeitgenössischen fiktionalen Literatur*. Tübingen 1988, S. 2. 1870年から1910年までのあいだに海を渡った350万人の移住者のうち、オーストリアからは290万人もの人々が渡米したという。神野、24頁。

⁴² Vgl. Anderle, S. 100. ローゼッガーは自身の雑誌上で、農民の保護や救済を訴えている。かれは農民の使命が「健全な人工の自然地域」の維持にあると考えていたからである。

⁴³ ローゼッガーの詩集『私の詩（*Mein Lied*）』なかの「ふるさと（*Heimat*）」の部には、「アメリカ」を表題に冠した一篇の有名な詩『友がひとりアメリカへ渡った（*Ein Freund ging nach Amerika*）』がおさめられている。そこでアメリカは、「沈まぬ太陽」と呼ばれる旧世界の故郷と対置される場所として描かれている。4連にわたって歌われているのは、シュタイマルクの薔薇、水、そして土という新日ぶたつたの世界をとりむすぶ紐帯についてである。Vgl. Rosegger, Peter: *Mein Lied*. In: *Gesammelte Werke von Peter Rosegger: Vom Verfasser neu bearbeitete und neu eingeteilte Ausgabe*. 40 Bde. Bd. 9. Leipzig 1913, S. 191.

ハイニシュは報告している、アメリカにおけるヨーロッパからの移住者たちは、またもや自分たちの先祖の古来の伝統にならって農場を作り上げようと努力している、と。それはかの地でも、おおいに利潤を生むということにはならないだろう。しかしながらかれらには、そのあらたな故郷にしっかりと腰を据えて定住するには、鋤がもっとも確実な手段であると思われるようだ。⁴⁴

ここでは、渡米したヨーロッパの故郷喪失者たちの置かれた境遇にも寄り添うことのできる、ローゼッガーの柔軟な姿が示されているように思われる。かれのアメリカ移住否定の姿勢のなかにも垣間見えるこうした揺らぎは、『最後の人ヤーコブ』においてすでに露見しているのではないだろうか。

生まれ故郷の維持と、他国における故郷創設を通じた農村文化の再生の二者択一を迫られたとき——理念上では迷うことなく前者に惹きつけられるのだが——、「アメリカ」は後者への支持をあくまでも抑制的に表明するトボスとなる。生まれ故郷の回復の可能性が絶たれてもなお、農民のあらたな出現を待ち望むとき、暫定的であれ「アメリカ」を選択することで、最終的な決断を先送りするためのローゼッガーの様子見はつづくのである。そこには、この国にかんする伝統的なトボス観の下支えもあっただろう。周知のように、アメリカは1776年の独立宣言以降、自由と「無限の可能性のある国」の象徴でもあった。⁴⁵ この国を旧世界がかかえる矛盾の解決に糸口をあたえる場所として、ローゼッガーは思い描いていたのかもしれない。

1870年以降、顕著になりはじめたドイツやオーストリアの農業危機は、90年代には大農業家をも倒産に追い込むまでに深刻化した。こうした同時代状況にたいし、反資本主義、反工業化を唱える農民小説を書くことで応答を試みたローゼッガーも、農業政策にかんする議論の場では「農業哲学者」⁴⁶として、現実的な対応策にかんする助言や報告を惜しまなかった。事実、自国の食糧供給を隣国の農産物に依存し、離農を促進して軍需産業を優先させていた国家による農民政策が、かれにとっては到底満足のいくものではなかったためであろう。こうした当時の国家方針にたいする批判的な姿勢は、作中における資本主義の体現者だった帝国議會議員カンペルヘアにかんする描写にも見出せる（547, 630）。

⁴⁴ Zit. nach: Anderle, S. 109. *Heimgarten*. 36 (1912), S. 859. 『ハイムガルテン』誌のアンダーレによる引用が、ここまでであるため、ローゼッガーがそのあとにどのような見解を述べているかについては、定かではない。なお、ハイニシュについては註46を参照。

⁴⁵ Küster, Hansjörg: *Schöne Aussichten. Kleine Geschichte der Landschaft*. München 2009, S. 80f.

⁴⁶ Vgl. Anderle, S. 100. これは経済学者であり、第一共和国の首相となったミヒャエル・ハイニシュ (Michael Hainisch) の言葉である。かれの呼び名からは、農業現場を熟知した作家ローゼッガーの発言が当時の議会において重視されていたことがうかがえる。

「アメリカ」のもつユートピア的な側面を完全に否定することはできない。それゆえこのトポスの選択は、実践的な解決の提示からはかけ離れているのかもしれない。だがそこに、現実味のないファンタジーをもたらそうなどという作者の意図を見出すことのほうが困難ではないだろうか。農村ユートピアとしての「アメリカ」にたいする慎重な取りあつかいは、作者のひとつの積極的な主張が込められ作法であるようにも思われる。ローゼッガーは移住者ヤッカールに、「いまひどい苦しみでもって、さらに悲惨なそれ（故郷）をひとつ創らねばならない」と生まれ故郷に代わる場所の創造にたいする覚悟を語らせていたのだから。

「アメリカ」というトポスを選ぶことで、自身の理念とそれとは矛盾する現実とをめぐるジレンマの解決を模索した作家ローゼッガー自身にあらためてふれて、本稿をむすぶことにする。

おわりに——ふたりのヤーコブ、そして作者ローゼッガー

愚直なまでに生まれ故郷を愛し、最後まで農民でありつづけた父ヤーコブ、そして自由への憧れを阻んだ愛すべき父との軋轢に苦しみ、アメリカで生きた息子ヤッカール。かれらに最後まで語り手として共感を寄せつづけた人がある。それが作者ペーター・ローゼッガーだった。農民として故郷に踏みとどまったヤーコブの人生、それはかれが選べたことのできなかった農民としての人生だった可能性もある。

物心ついた頃すでに、ローゼッガーは故郷を手放した存在だった。⁴⁷ 農民の子として生まれながらも、身体の病弱さゆえに農民生活を送ることができなかったかれは、巡回仕立屋に弟子入りする。農民の暮らしぶりを肌で感じることできたこの経験が、のちの創作活動における財産となっていたことは、1870年代に多く書かれたかれの農村物語からもあきらかである。だがそのさいに看過できないのは、当時ペーター少年にむけられた「軟弱者（Schwächling）」という言葉だろう。⁴⁸ 農村社会からの排除を意味するこの嘲りの言葉が、皮肉なことに、土地に縛られることのない職、すなわち物書きへのキャリアを築く突破口にもなっていたのだから。

幼少期、学校教育の機会に十分にめぐまれることのなかったローゼッガーは、活字に飢えていた。教養人とされる都市人の規範を身につけようとした農民が「初等教育の知識」不足を自覚し、自己卑下に陥ってしまう姿については、本作の序文で簡潔に言及されている。この悪循環をなす問題の所在を、農民であるという自意識の低下に認めるローゼッガーは、自身の主人公ヤーコブ

⁴⁷ 本作にかかわる作者の自伝的要素であり、当時グラーツで教育の機会を得ていたかれにとって、故郷喪失を意味する出来事だったのが、1868年5月になされた両親の家クルッペネッガーホーフ（Kluppeneggerhof）の売却と、1872年の母マリアの死であるという。なお、本作の舞台のモデルとなっているのは、かれの生まれ故郷ミュルツタールの近村である。Vgl. Schoeber, Wolfgang: Nachwort. In: Rosegger, Peter: *Als ich noch der Waldbauernbub war*. Stuttgart 2005, S. 305-314, hier S. 310.

⁴⁸ Ebd. この呼び名については、幼少期の回顧録『森の故郷（Waldheimat）』（1877）に詳しい。

に同調するかのように、こう述べている。

ひょっとしたら現代は、自己を真に自由に、かつ一目置かれた者にする手段をかれ（農民）にもたらしただのかもしれない。だがかれは、その確固たる農民の特質（Bauerncharakter）や、それにかかわる忍耐力（Beharrungskraft）を失ってしまった。時代の諸々の病、つまり軽率さ、誇大妄想が、かれを捕らえたのだ。[...] そうして現在では、ある奇妙な逃避が起こっている。鋤からハンマーへ、ハンマーからたとえばコンパスへ、それからペンへ、学位等への逃避が起こっている。（391f: 括弧内の補足は執筆者）

「時代の諸々の病」への耐性に欠ける農民自身にも、その没落の要因を見てとったこの序文は、ローゼンガッガーの自己批判的な診断だといえる。事実かれは、このペンへ「逃避」した。そして没落していく身分のために、あるときは農民世界の真ん中から、あるときは農民とは一線を画した世界の側から、かれは声を発したのである。このような作者の帰属意識は、シュタインロイター父子——生まれ故郷を介した過去との連続性を象徴する父ヤーコブと、生まれ故郷との空間的な隔たりによって自他にたいする客観的なまなざしを得た息子ヤッカール——の形象に表出していたといえるだろう。

ヤッカールはアメリカ便りのなかで、新天地での惨状が「どれほどつらくて骨の折れることなのか、それを書き記すことはでき」ないと述べていた。「書く」ことも開墾という贖罪行為にひとしい一種の慰めとしてみていたかれの告白は、現実的な解決策を提示しえないまでも、なにかしら書かざるをえなかった作者ローゼンガッガーの肉声にも近いように思われる。さらに、ヤッカールがあらたな故郷創造への覚悟を語った場所「アメリカ」は、農村ユートピアとして性格づけられてはいるものの、危機的現状からの打開策を模索しつづけたローゼンガッガー自身の課題を象徴するトポスでもあったのである。

Eine andere bäuerliche Utopie

— „Amerika“ als mögliche neue Heimat in Peter Roseggers *Jakob der Letzte* —

ASO Yoko

Die beschleunigte Industrialisierung, die Mechanismen der kapitalistischen Wirtschaft und die sich verschärfende Konkurrenz lösten im späten 19. Jahrhundert eine Agrarkrise aus. In seinem Roman *Jakob der Letzte* (1888) schildert der österreichische Dichter Peter Rosegger (1843-1918) den durch diese bedrohliche Krisenlage ausgelösten Untergang des alpenländischen Bauernstandes. Seine Fiktion der von tragischem wirtschaftlichem Verfall und Auswanderung bedrohten Bergbauerngemeinde Altenmoos zeigt die sozioökonomischen Ursachen des Niedergangs des Bauerntums (Bodenspekulation, technische Neuerungen, Bauernlegen, Wucher, Landflucht, Ansiedlung von Industriebetrieben usw.), doch wollte Rosegger in seinem agrarisch-konservativen Roman zugleich mögliche Wege aus der Krise aufzeigen. Spätere Interpreten warfen ihm allerdings vor, dass es ihm nicht gelungen sei, tatsächliche Lösungen zu finden. In dieser Abhandlung geht es stattdessen darum, wie sich Rosegger als „Bauernphilosoph“ mit der ihn umgebenden Wirklichkeit auseinandersetzte. Dafür ist das Amerika-Motiv ein im Roman zwar nur am Rande begegnender, aber wichtiger Schlüssel.

Die Hauptfigur des Romans ist der das alte konservative Bauerntum verkörpernde, eng an die Heimatscholle gebundene Kleinbauer Jakob Steinreuter, der sich unermüdlich den zeitgenössischen Phänomenen widersetzt, die der Erzähler „Weltgift“ nennt. Im letzten Kapitel des Romans begeht der beim Wildern ertappte Jakob, nachdem er den Förster erschossen hat, schließlich in einer „Im Gottesfrieden“ genannten Waldschlucht Selbstmord, wobei der Gegensatz zwischen diesen im Christentum als große Sünden erachteten Taten und dem heiligen Namen des Ortes nicht zu übersehen ist. Vor seinem mehrdeutigen Ende hatte Jakob einen Brief von seinem lange tot geglaubten ältesten Sohn Jackerl erhalten, der schon als

Knabe von zu Hause fortgelaufen war.

In diesem Brief berichtet der Sohn, wie er nach langen Irrfahrten Amerika erreichte und dort nach vielen Schwierigkeiten endlich in einer abgelegenen Gegend Oregons gemeinsam mit anderen deutschen Auswanderern die an die Heimat erinnernde Siedlung Neu-Altenmoos gründete. Das Leben in der neuen Heimat ist hart, aber doch von einigem Erfolg gekrönt: Jackerl ist zum bäuerlichen Leben zurückgekehrt, hat einen eigenen Hof errichtet, den er wie den seines Vaters „Reuthof“ nennt, und ein Mädchen einer deutschen Nachbarsfamilie geheiratet. Wie die biblische Gestalt des Josef, der in Ägypten zu Reichtum und Ansehen kam, scheint also auch Jackerl in der Fremde wenigstens ein einträgliches Leben gefunden zu haben.

Dennoch ist für den Autor wie für seinen Protagonisten Jakob das Verlassen des Herkunftsortes und der Neuanfang auf anderem Boden kein Ausweg aus der heimatlichen Misere. Die Erfolgsgeschichten von Auswanderern in Amerika erschienen Rosegger bereits unrealistisch. Zudem war das sozialhistorische Phänomen der Auswanderung im 19. Jahrhundert eng mit dem Zerfall der Dorfgemeinden in der Heimat verbunden. Daher ist Amerika in diesem Roman keineswegs einfach ein Topos eines neuen besseren Lebens, sondern zeigt vielmehr ein Dilemma auf: Die Weggegangenen können zwar in der Fremde neu beginnen, haben aber doch ihre eigentliche Heimat verloren, und ihr Weggang führt zudem zum Untergang der traditionellen Bauernkultur ihres Herkunftsortes.

Insofern kommen im Roman die Schwierigkeiten zum Ausdruck, vor die sich Rosegger bei seiner Suche nach einer Lösung gestellt sah. Dass der idealistische Dichter seine Figur Jackerl in Amerika als Bauer erfolgreich einen Neuanfang machen lässt, offenbart seine Sehnsucht nach der Aufrechterhaltung der ursprünglichen bäuerlichen Kultur. Das bleibt aber letztlich utopisch und bringt für die Heimat schlimme Auswirkungen mit sich. Der vieldeutige Topos „Amerika“ wird so zum Symbol für Roseggers Problem, einen Ausweg aus der Krise zu finden.

Der in seiner Jugend für den Beruf des Bauern zu schwächliche Rosegger musste selbst einen anderen Broterwerb wählen. Im Roman kritisiert der Dichter indirekt aus der Perspektive von Jackerl die Heimat- und Bauernideologie der Vätergeneration.